

第47回 日本ジオパーク委員会議事録

日時：2022年12月16日(金) 10:00～16:00

場所：ちよだプラットフォームスクウェア 504～506 会議室

<委員長>

中田 節也 東京大学名誉教授 防災科学技術研究所火山研究推進センター長

<副委員長>

宮原 育子 宮城大学・宮城学院女子大学名誉教授 宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授

<委員>五十音順

ヴォウォシェン・ヤゴダ 一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 事務局員

大野 希一 一般社団法人 鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会 事務局次長兼主任研究員

久保 純子 早稲田大学 教育学部 教授

柴尾 智子 元公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

下田 一太 筑波大学 人間総合科学学術院 准教授

菅原 久誠 群馬県立自然史博物館 地学研究係 主幹

田中 裕一郎 産業技術総合研究所 地質調査総合センター シニアマネージャ・招聘研究員

新名 阿津子 高知大学 教育研究部人文社会科学系 人文社会科学部門 講師

橋詰 潤 新潟県立歴史博物館 学芸課 主任研究員

長谷川 修一 香川大学特任教授 四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構 副機構長

長谷川 卓 金沢大学 理工研究域地球社会基盤学系 教授

山口 勝 日本放送協会横浜放送局 放送部 チーフアナウンサー

欠 渡辺 綱男 一般社団法人 自然環境研究センター 上級研究員

渡辺 真人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター 上級主任研究員

<日本ユネスコ国内委員会>

堀尾 多香 文部科学省国際統括官付国際統括官補佐

<関係省庁(オブザーバー)>

沼 美紗 内閣府 地方創生推進室 参事官補佐(内閣府地方創生推進事務局)

上村 兼輔 内閣府 地方創生推進室 主査(内閣官房 デジタル田園都市国家構想実現会議事務局)

柴田 伊廣 文化庁 文化財第二課 文化財調査官

佐藤 佑樹 経済産業省 産業技術環境局 総務課産業技術法人室 係長

萩原 和子 環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室 エコツーリズム推進専門官

<JGN(オブザーバー)>

小林 猛生 系魚川ジオパーク協議会 事務局員

<事務局>

古澤 加奈 JGN 事務局長
齊藤 清一 JGN 事務局次長
関村 絢 JGN 事務局員
栗原 伸彬 JGN 事務局員

【開会・委員長あいさつ・報告事項】

委員長：今回も顔を合わせて会議を行うことができ、喜ばしく思う。一名はオンラインで参加ということになる。本日は長丁場になるが、よろしく願います。

前回の委員会から起こったことについて簡単に紹介する。一つは、世界の審査が9月に引き続いて10月も行われた。白山手取川の新規認定審査、伊豆半島、山陰海岸、阿蘇があった。それに引き続いて、ユネスコ世界ジオパークの研修会が11月15日から25日に開催された。それには日本から講師として古澤さんと阿蘇の事務局長が参加した。参加者は100人ほど、44ヶ国からの参加。キャパシティビルディングに関してはユネスコカOUNシルのほうでも議論されたが、新しい人だけが参加するのではなく、入れ替わった新しいマネージャーについてもどんどん参加してほしいというコメントがあった。

それから、ユネスコ世界ジオパークカOUNシル会議が12月7日、8日、9日にかけてオンラインで開催された。これは7回目の会議で、9月の会議に続く第二部ということで行われた。そこで日本の再審査、新規認定審査について議論された。この会議には私は出席したが、委員会の方からは委員2名、事務局から1名が傍聴参加していただいた。文科省の方からは2名参加いただいた。そのほか審査対象の日本のユネスコ世界ジオパークの方たちにも参加いただいた。そこで審査された結果についてはまだ公式発表はないが、この場限りということで（ただし議事録には残す）、報告する。15の新規申請があり、そのうちの9地域が新しく推薦されることとなった。その中に白山手取川ジオパークも含まれている。それから、保留になっていた2地域も新しく推薦されることが決まった。

それから15の再認定審査が行われて、その結果、山陰海岸ジオパークがイエローカードで条件付き認定ということになった。9月、それから12月の会議の結果、今まで177地域46ヶ国であったものが、このままいくと、195地域48ヶ国という形になる。いずれにしても、正式な新規認定地域の決定については、来年5月10日から24日に開催されるユネスコの執行委員会で最終決定となる。その間に政府間調整などがあって、場合によっては予定通りにならないということもあるので、これについては取り扱いには注意ということになる。

以上が主な報告事項であるが、細かい内容、例えば山陰海岸ジオパークのイエローカードについては、本日の午後に、特に参加した方、カOUNシル会議を傍聴した方の意見を交えて議論したいと思う。私自身は日本の審査には一切加わることが出来ず、実際どう議論されたのかという詳細はわからないので、午後に意見をいただいて議論したいと思う。

事務局：報告事項ではないが、事務局から本日の参加について補足させていただく。本日はオンライン参加はなしで、現地開催ということで案内していたが、委員1名が昨日からコロナで療養中ということで、オンライン参加。調査の報告は一緒に担当された現地調査員に委員長から依頼をして参加していただいている。

委員長：今の報告について質問等願います。

委員：質問だが、なぜ全面对面でやらないといけないのか、いろいろ事情があるなか、今のご時世オンラインも便利なものもあるが、併用してもいいのではないか。

委員長：最近の会議は実質的にオンラインで議論されているというのは明らかだが、顔を見ながら議論するというのが重要な面もある。オンラインでは何を考えているのか実はよくわからないということがある。対面

の方がメリットはいろいろある。そもそもジオパークの審査というのは現地に行って、ジオパークに関わっている人と対話しながら進めていくという方針。それに従うとやはり委員であっても委員会の審議は対面で行うのが好ましいと思う。もちろん、さらに厳しい状況になれば、オンラインで進められることもあるとは思いますが、今回は、対面でも問題ないのではないかという判断をした。

委員：承知した。

委員長：その他報告事項等について質問等あるか。

細かい議論は午後に行うが、その他に何かあればお願いします。

一同：(質問なし)

委員長：白山関係の方、何かあるか。

委員：特にはないが、先程の報告については完全に黙ってなければならないのか。

委員長：実は今日の夜中にユネスコの方で一度結果が公開されたが、朝にはその情報のリンクが切れていたの
で、多分どこかでストップがかかった。

委員：それは誰かがもう閲覧した可能性はあると。

委員長：そうなる。世界的には各地域 SNS で審査が通ったと公開しているので、閲覧されていても問題はない。

ただ、こちらが率先して情報を出すと、報道的にも大変になる。

委員：委員会のネットを見たということで話しをしてもいいのか。

委員長：その情報は今出ていない。

事務局：JGC のホームページでお知らせをする予定で準備はしているが、掲載しようとしたらリンク切れにな
ったために中止した。カウンスルのページにはそもそもニュースがまだ掲載されていない状態。ユネスコの
News Article というページにのみ掲載されていた段階で、そのリンクが現在切れているというのが最新の状
況。状況を確認しつつ、もう一度アップロードされたら速やかにお知らせを JGC のウェブサイトでも掲載す
るという予定。今は様子を見ているところ。

委員：多分審査を受けた側は気にしていると思うが、それに対してどうしたらよいか。JGC の発表を待てと伝
えたらよいか。

事務局：審議対象地域には朝メールを送り、事務局には対応をしている。リンクが切れたということも伝えた
ところ。それから、今回は結果だけが発表される予定だが、白山手取川に関しても、今回で認定が決定する
わけではなく、あくまで執行委員会で承認された段階で正式に決定されるということも事務局とはやり取り
をしている。

【議題① 日本ジオパーク再認定審査：南アルプス】

委員長：少し早いですが、審議事項に移りたいと思う。まず議題① 日本ジオパーク再認定審査の南アルプスにつ
いてだが、これについては私が報告する。一覧表と通知書の両方を見ていただければと思う。簡単に私が報告
し、他の委員から補足をお願いしたいと思う。

このジオパークは前回条件付き認定で、地元はその結果をなかなか受け入れられないという中でいろいろ
議論を開始された。最終的に日本ジオパークでいくという判断をしたのは今年に入ってからで、昨年度末に
協議会でジオパーク活動を継続することを決めた。そのため、実質的に活動したのはそれ以降となるので、
非常に短い時間で議論をして審査に挑んだということになる。

指摘事項はいくつかあり、一覧表にあるとおりだが、そのうちの 하나가事務局体制の強化で、実質 2 名で
動かしていたが、これは特に強化されたわけではない。だが、各市村が連携し、各役場に関係の事務局員を
置いて密に連携を取るようになったとのこと。ただその過程で、富士見町が今まで協議会に参加していたが

離脱した。これも協議会で決定している。今まで4市町村だったのが、3市村になった。その事務局体制のなかで、コーディネーターを設けることを考えなさいというのがあったが、現状ではそこまで手が回らないということで、今は無理だという回答をしている。そういった意味では事務局体制の強化については、いろいろ議論してきていることはわかっているが、あまり整備されていないというのが現状。

2つ目に基本計画と事業計画の改善があるが、これに関しては、計画はあるが概念などが抜けていて、完全には書き込んでいない。これについてはワーキンググループを作って、現在検討中というかたちになる。

3つ目は、ジオサイトの分杭峠における、ジオパークの理念にそぐわない、すなわち非科学的な情報に基づいた観光を継続していることに関して、学術部会が実際に現地調査をして、ゼロ磁場といったものは存在しないということを明確にし、看板や町の観光課のホームページなどからは「ゼロ磁場」という用語を削除している。それから、分杭峠における表示については、誤解しないように移動させ、チラシで科学的根拠のないものだという表現をしたが、「気場」や「パワースポット」といったことに関しては特に言及しないというかたちにしている。

次の「ジオサイト設定の再整理」ということで学術的な価値等の論文の裏付けがあるかということなどを確認してきている。

また、このジオパークはユネスコエコパークエリアに完全に含まれるわけだが、それについての棲み分け、あるいは相乗効果について考え始めているとのこと。名前の由来にもあるが、ジオパークになる前はもともと世界遺産を目指していた。そのために南アルプスという文言が前に出て、エコパークになった後はユネスコ世界自然遺産登録長野県連絡協議会を取りやめたというかたちになっている。この名称的な問題も残るが、とりあえずはユネスコエコパークとの相乗効果を考え始めているというところ。色んなワークショップを行ったり、エコパーク・ジオパークそれぞれで講演会を行ったりなど、お互いの連携を取るようになってきている。ただ、パートナーシップがきちんと締結されていないのはそのままとなっている。

それから自然災害・防災に関する啓発活動の検討については、それほど進んでいるわけではないが、例えば国内6大学、飯田市内の5つの高校を集めて学輪IIDAというものを構成して、特に災害、それからエコパーク等について学習会を開催している。

ネットワークへの貢献、これについてはあまり進んではいない。

拠点施設の充実と効果的な運用については、ガイドを拠点施設において、いろいろ取り組みを起こしている。これは時間的な問題でまだ整備されていないというのが現状。

主な評価点としては、3市村の協力体制がそれなりに確立された。特に、条件付き認定となった後に、飯田市議会が有機的に動いて、幹事会がネガティブであったのを逆に飯田市側が盛り上げるという活動があったし、飯田市議会が色んなジオパークに活動視察に行くということも行っている。そういう意味で、これまで伊那市一本で活動していたものがより活発化してきている。

それから、学術部会・教育部会・観光部会が活発に動くようになった。それまでも存在はしていたがほとんど休眠状態だったものが機能するようになった。エコパークとの相乗効果、「ゼロ磁場」については先ほど解説した。

また、ガイドの方たちが非常に意欲的に解説を行っているという現状がある。

それから、自然災害跡地である大西山崩壊地形、これを大鹿村中央構造線ミュージアムの窓から眺めながら講義を受けるというイベントを行なうなどの進歩が認められる。

改善を求める点は、大型の施設、特にリニアモーターカーの工事等がさかんに行われているところだが、例えばそういった施設を利用してジオパークの宣伝をする等のことをもっとやってほしいということ。実際にはガイドが視察を行ったりして活用を考えているところではあるが、もっと進めてほしい。

また、保全・管理ということで、国・県が協議会に入っていない。国立公園・エコパークなので、国、あるいは県の管理する人が協議会に参加してほしい。

それから、4番目で、ここの協議会の予算が年間150~200万円程度しかない。非常に変な仕組み。各自自治体が看板の整備などをすることになっているが、それらの整備は協議会で決めたかたちにはなっていない。この予算体系はこれまでの審査でも指摘しているが、まだきちんとした仕組みづくりができていない。

あとは基本計画をきちんと作ってほしいということ。

それから、このエリアは実は市街部から外れている。事務局は伊那市内にあるし、飯田市の博物館等積極的に盛り上げているところはやはりエリア外にある。市の一部を含むような形でエリアが構成されているので、エリアについても再考してほしい。これはエリアを広げなさいとか、事務局を移しなさいという提案では必ずしもなくて、どのようにしたら一番効率的かということを経済協議会で考えてほしいということである。

簡単だが以上となる。現地調査担当委員、コメントをお願いします。

委員：2点、個人的にコメントをさせていただく。

まず、名称が「南アルプスジオパーク（中央構造線エリア）」となっているが、個人的にそれが引っかかっている。先ほど委員長から説明があったが、もともと世界遺産を目指していて、南アルプスが前面に出ていたということを知ったが、実際に現地を視察すると、南アルプスは確かに後ろにそびえているが、メインとなるのは中央構造線に関わるものという印象を受けた。名前をすぐに変えるのは大変なので簡単には提案できないと思っている。

もう1点、委員長からも説明があったが、伊那市と大鹿村と飯田市だが、伊那市の一部、大鹿村の全域、飯田市の一部で構成されているので、活動している人や拠点がエリア外になっている。それなら伊那市と大鹿村と飯田市の全域にしたら良いのではないかとも思うが、そうすると伊那市や飯田市は伊那谷、あるいは中央アルプスの一部を含んでいるので、名称が難しいところ。実際にエリアに掛かっているのは平成の大合併で合併した、旧・高遠町、旧・長谷村、旧・上村、旧・南信濃村、そして大鹿村。合併前のまともには残っているので、簡単にエリア拡大も言い出せない。このあたりが難しいところだと感じた。以上。

委員長：ただ今の報告等について質問・コメント等あればお願いしたい。

副委員長：前回の調査に行ったが、本日の報告を聞いて、特に飯田市が活発になったというのが大変良かったと思う。一方で富士見町が外れたということで、実際に前回富士見町にあるジオサイトについても説明を受けたが、中央構造線とのかかわりなどほとんど理解することができなかつたので、今回エリアとして自治体を整備されたのはわかりやすくなったのではないかと感じた。

質問だが、先ほどゼロ磁場について、伊那市が観光的な側面でのプロモーションを分杭峠でしていても思い切って削除したとのことだが、観光協会主催のツアーはもう止められたのか。

委員長：観光協会はシャトルバスを今でも提供している。観光協会の宣伝からは「ゼロ磁場」という言葉はすべて削除され、ガイドもそのワードには触れないことになっている。

副委員長：単に分杭峠行きのシャトルを出しているといった感じか。

委員長：それで合っている。分杭峠へは道が細く、車が通れなくなるのでシャトルバスは必須で、これは市としてはそのまま提供していきたいということだった。

副委員長：承知した。

委員長：そのほか何かあるか。

事務局：今回9月12日付でエリア変更の申請書が出ているので、変更を認めるかどうかまで含めて本日確認をしていただく必要がある。よろしくをお願いします。

委員長：内容は富士見町を除くということ。現地では特に申請については議論をしていないが、今副委員長か

ら説明があったように、富士見町の一部、南側だけがジオパークに入っていたが、中央構造線に関するサイトではない。どちらかという系魚川-静岡構造線を見せていた。地質の多様性はあるが、このサイトが欠落するからといってジオパーク全体の価値が損なわれるといったことはない。ただ人口的には少なくなる。1/3くらいが抜けることになる。これについてもご意見お願いしたい。

委員：分杭峠からゼロ磁場という文言がなくなったのは本当に良かったと思う。私は伊那谷の活断層をテーマに卒業論文を書いたり、東京大学出版会の『新編 日本の活断層』でも、20 万分の1 飯田図幅を担当していた。竜西部、要するに中央アルプスのふもとの断層を中心に調査したが、竜東という今回の範囲も担当した。今回富士見町が抜けたというのは、系魚川-静岡構造線という今も活動しているということを確認できる貴重な場所である活断層がジオパークから抜けてしまったというのは非常に残念。報告を聞いていると、中央構造線にこだわっているからこのような結果になったと思うが、富士見町こそ、信濃と甲州の間の国界橋の下のグランドキャニオンと呼ばれるところに、構造線の活断層の露頭が橋から見えるという場所もあり、そういう意味ではもう少しテーマをしっかりと持ってジオパークを運営していれば、一体性を保てたのかと思うと残念。

竜東と竜西は大きな天竜川を挟んで、文化も違うが、飯田市が今回頑張ってきてくれたという話もあったので、伊那市や駒ヶ根市、飯田市などの大きな市が率先して、竜東、竜西関係なく一体化を図ってくれるのであれば、エリアを拡大してやっていただければと期待したい。

あわせて、エコパークとの連携についてどう考えているのか。やるならちゃんとやった方がよい。エコパークの方には富士見町が残っているので、ジオパークからは富士見町は抜けるにもかかわらず、エコパークとの相乗効果を目指すということの矛盾はないのか。もっと言えば、富士見町の南半分の山の所だけでなく、ハケ岳山麓に掛かってしまうかもしれないが、系魚川-静岡構造線の谷にあたる富士見町の特徴も含めてジオパークとして指定した方が、エコパークとの相乗効果はあるのではないかという気がする。

委員長：ご意見感謝する。他にあるか。

委員：この地域はもともと三遠南信エリアで南アルプスを囲んで3つの地域に分けてそれぞれをジオパークに認定していき、最終的に南アルプスジオパークに統合しようという計画が当初あったと聞いている。それが理由で名称に「(中央構造線)」と入っている。ただ、時間が経つにつれ、その定義がずれてきていて、今回のように富士見町が抜け、伊那市、飯田市の一部と大鹿村で運営していくということになっている。そのため、ジオパークとして領域を再定義する時期が来ていると感じた。先ほど委員が述べていた、他の地域を入れると中央アルプスが含まれてしまうので南アルプスというテーマがずれてしまうという話も、再審査などのタイミングで定義を見直すことも併せてやっていただいた方が、ジオパークを立て直す分には良いのではないかと考える。

それから、市一部でやっている、行政側はやりづらさはないのか。山陰海岸の京丹後市は京都府の中で唯一ジオパークに含まれた地域だったが、1市のみだと府としては資金を出しづらいというのがあったので、南アルプスも市域全部を含めたほうが市や県から資金援助がしやすい状況が整うのではないかと考えたので、スムーズな運営という意味でもエリア再定義があってもいいのではないかと。

それからスタッフに女性が3人となっており、ジェンダーバランスが非常に悪い。女性の雇用の部分で地球科学の専門家が嘱託である点、常勤ではあるのだろうが、雇用の不安定さが感じられるがそのあたりは大丈夫なのだろうか。

委員長：ジェンダーバランスが悪いのは指摘の通りである。

エリア再定義についてはきちんと通知書に書き込んで、議論して自分たちで方向性を考えてもらいたいという旨を記述したいと思う。

雇用条件だが、嘱託にはなっているが、パーマネント扱いということであまり気にしていなかったというのが正直なところ。確かに不安定なところではあるので、そのあたり明確にし、安定的に雇えるように考えてというのは指摘すべきと考える。

委員：事務局体制をどうするかということがかなり肝になる気がする。メインの活動がエリアの外にあるというのは非常にゆがんだ状態だと思う。それをどう地域として解決するかといっても多分今地域の方では解決できないと思う。そうなると、ネットワークとして問題の解決、サポートをしていかないと、地域に丸投げしても考えるのが難しい状態な気がする。エリア全体でとなると矛盾が生じてしまうし、リコメンデーションの出し方が非常に難しいというのが感想。

それと、資金の問題が現在顕在化していないのは予算が少ないので目立たないからではないかと思うが、協議会として数千万規模の予算になったときに、エリアの一部がその利益を得られないような状況になっていけば当然それは議会として言われる可能性はあるので、この点に関しては地域で解決する必要があると思うが、どのようにリコメンデーションを出すかといったところの工夫と、出した後 JGC がどのように支援していくかといったことを併せてリコメンドできれば良いという気がする。

委員長：その通りだと思う。協議会が弱体化しているというのは予算をしっかりとっていないから。それから、事務局の移転と市街地をエリアに含めるといったことは首長の方たちに直接ぶつけたが、自分たちでは積極的に取り組めないという感じだった。難しい問題。ネットワークが絡んだら解決できるという問題でも必ずしもない。

委員：富士見町のトップの方たちが離脱を決めたのだと思うが、ジオパーク活動を行っていたであろう地元住民についての情報等審査の時に何か聞いたか。

委員長：結局富士見町には行っていないのでわからない。協議会として離脱を決めているので、そこには関与できなかった。

副委員長：前回の調査の時には富士見町にも行き、ヒアリングをした上でサイトに行った。富士見町では建設課がジオパークの担当だったが、町民はジオパーク活動についてほぼ知らないという状況だった。親類が富士見町に住んでいるが、ジオパークの取組は聞いたことがないという反応だった。調査が終わった後に親類から公民館にジオパークの情報が入るようになったという報告はあったが、町全体にジオパーク活動が広がっていたかというところでもなかったと思う。

委員：富士見町が離脱したのはなぜなのか、理由をお聞きしたいのが一つ。

それから、エコパークには残っているということだったが、エコパークを構成している自治体がこの3市村と富士見町だけなのか、それともその他にも構成団体があるのか。エコパークとの連携となったときに、どこに事務局があってどのように進めるのが一番効率的かということに関連してくると思う。

委員長：富士見町の離脱の理由についてきちんと説明は受けていないが、富士見町は北側にハヶ岳山麓の色々な観光地を抱えている。そちら側が中心で、ジオパークには付き合いで入っているという印象を受けた。この機会に、もともと積極的でなかったことがあって、離脱を決断したという推測をしている。

委員：報告書の中で、長野県、それから飯田市の公民館の活動がかなり活発ということで目に入ったが、「公民館における社会教育についてはまだ取り込めていないが、飯田市の公民館から要望が来ている。」と調査書に記載があった。こういった要望なのか教えていただきたい。

委員長：そこまで調査できていない。これはプログレスレポートの文章を借りたもの。

委員：承知した。

委員長：このあたりで採決を取りたいと思う。再認定について反対の方。

一同：(意見なし)

委員長：再認定に賛成の方。

一同：難しいところ。

委員長：前回条件付き認定なので、今回条件付きとなると取り消しとなる。

委員：本当にジオパークをやりたい人は市の中にどのくらいいるのか。

委員長：首長と事務局長はやる気がある。あとは博物館関係の方と、ガイドの方たち。それ以上はヒアリングできていない。

委員：飯田市議会はどの程度やる気なのか。

委員長：飯田市議会は、幹事会がジオパークをやめようとなったときに、「ちょっと待って」と飯田市議会を動かした経緯がある。活動に関しても、先程説明した学輪 IIDA など飯田市街地では非常に積極的に動いている。ただ、高校は実は高遠にしかない。そのあたりは非常に複雑で、実質動いているのがエリア外の人たち。その辺は矛盾がある。

委員：飯田市美術博物館は熱心。

委員長：学術部会長もそこの方がやられている。それはそれで問題もある。

副委員長：『伊那谷自然友の会』も飯田市美術博物館で事務局をやっている。

委員：記載されている推奨事項を見る限り、かなり優しいと感じた。限りなくレッドカードに近いグリーンなのであれば、もっと厳しく書くべきだと思う。2年経っても推奨事項はほぼすべて△なので、この状態でグリーンにして、4年後本当に大丈夫なのかという不安が強い。

委員長：不安ではあるが、ではレッドカードにするかということ。そこまでの覚悟があるならレッドにするがよいか。

委員：出し方が難しい。一番良いのはもう一度作り直してもらうこと。ただ、ここでレッドカードを出すと、それに対する反発が生まれる。そうすると、地域が良くなる云々の前に JGC と地域の対立を生みそうなので、それは避けたい。かといって、今の優しめの記述のままグリーンを出すと、それはそれで変な安心感を与えて地域の意識の低下につながる。そういったことを考えると、出し方は非常に難しい。もう一度イエローを出したいというのが本音。

委員長：本音は私たちもそう。ただ、一度完全にやめるといった状態からここまで持ち直したという点は評価したいと思っている。

委員：そこでやめるのを応援するという選択肢がなぜなかったのか。建設的なやめ方を提示した方が良かったのではないかと、いうのはあるが、今言っても仕方がない。継続するとしたら、JGN として全面的に支援しない限り、4年後何も起こらない気がするので、「やらなければいけないことはたくさんあるが、その代わり支援する」と、そういったことが伝わるようなメッセージを出さないといけない。

委員：富士見町が離脱したことに関して、JGC として拒否権はあるのか。今回はグリーンを出すか、富士見町が離脱することはこれまで進めようとしてきたこと、例えばエコパークとの連携や南アルプスとして一体性をもってやっていくといった事とは矛盾するのではないかと、といったことを条件に付けるといったことは可能なのか。

委員長：しかし、富士見町の離脱に関しては協議会で決定していることなので、JGC としては言うことはできない。

委員：承知した。

委員：縮小範囲は 10%未満。

委員長：人口は 10%未満ではないが、20%ほど減っている。

副委員長：前回の調査でイエローカードを出しているわけだが、それに対する地域の反応がかなり大きかっ

た。そこで、委員長と当時の JGN 事務局長が行って改めて説明をした。審査員の態度が悪かったという批判もあったが、JGC としては伊那市のみが悩みながら運営している事務局の体制など控えめに言ってこのままでは危ないと伝えた。また、ジオパークに対する熱、本当にここで中央構造線のジオパークとして全員でやっていこうというところがほとんど感じられなかったということが前は非常に残念だったが、委員長と事務局長が行って話をした中で、飯田市の方々が改めて南アルプスジオパークの価値に気づいたということがあり、その方々がもう一度やってみようと思ったことについては気運が上がってきたのではないかと思う。また、事務局体制の表を見ても、伊那市のみではなく、JGC が求めていた、ジオパークエリアの自治体からのエフォート、参加を位置づけてほしいという要望にも応えているので、やろうかという腹が決まりつつあるというところも見える。弁護するわけではないが、体制を色々変えながらも、自分たちでやっていこうというところによりやく辿り着いたというようにも感じられる。もちろん、通知書については辛めに書いて、今後の4年間で良いジオパークにしてもらえればということを楽しみたいと思う。

委員長：これ以上議論をしても仕方がないと思うので決を採る。反対、賛成、棄権。まず、反対、レッドカードの方。

一同：(意見なし)

委員長：賛成の方。

委員：推奨事項は新しく書き直すか。

委員長：もちろん厳しく書き直す。

委員長：では棄権の方。

委員：反対に1票お願いする。

委員：私も反対で。

委員長：反対2票。以上の結果、グリーンで、辛めに書き直すということ。

【議題② 日本ジオパーク再認定審査：白滝】

委員長：続いて議題② 日本ジオパーク再認定審査の白滝に移る。報告をお願いします。

副委員長：現地調査は調査員3名で入った。白滝は前回イエローカードで、6つの指摘事項があった。やはり一番大きかったのは事務局体制の点で、2017年以降に人員削減をしたり、専門員が不在だったりということで、ジオパーク活動自体が後退・停滞しているのではないかということがあった。この点を、白滝ジオパークの懸案として挙げられていた。そのほか、可視性の問題やガイドの養成、ジオサイトの整理等、他のジオパークを参考にして整備をしてくれという課題を出していた。

直接的には前回のリコメンデーションで、専門員を絶対に雇いなさいという理由でイエローカードにしたわけではなく、現在の人員・予算で行えること、協働することで行えること・行えないことを整理して、運営体制を整備してくれという指摘だった。

今回現地調査に行き、前回の6つの指摘事項は完全にではないが着手し、それぞれの課題に対して対応していることが確認された。主な評価点に書かれているが、特に事務局体制に関しては、現在の人員・予算の中でという条件で、今年の6月から協議会の9つの構成団体がワーキングチーム委員会として事務局の中で位置づけられ、事務局の事業計画の推進や、ジオサイトの整備・保全を行っている。これは民間の方たちで、NPO 法人のえんがあるジオ倶楽部さんなど、保全・保護活動に関わっている方々がジオパークの事務局の一部として位置づけられ、活動を行っている。主な評価点の2点目に記載されているが、生物多様性の保護、観光振興、地元の商品開発に関わる民間事業者や団体がいて、事務局と共にジオパークを非常に盛り上げていこうという気運がある方たちが一緒に参画していた。

努力した点としては、ジオツーリズムの部分では、ワーキングチームのネットワークも含めて、地元の農家や道の駅、地場産品の開発者といった事業者と連携しながらツーリズムの構築を行っている。

白滝に関しては、降雨災害によるジオサイトまでの林道が一時期不通になっていたなど災害復旧や、コロナの対応で活動はゆっくりではあったが、一つ一つ自分たちのジオパークの活動ができるようにということでクリアしている様子が見て取れた。

改善を求める点は7つある。過去の指摘事項の中で、2つ目に記載があるが、地質学分野の専門員の雇用についてはこの2年間では実現しておらず、これを引き続き検討してほしいということ。その契機として、来年、国際黒曜石会議が遠軽町をホストとして開催されるので、そういったことを一つのチャンスとして動いてほしいということを一項目に記載した。

3点目は、JGNメンバーとして、地域への貢献できるような実質的な活動、例えば審査員・現地調査員を送るといったことが必要となるので、中・長期的な視点に立って、人材の育成をしてほしいということ。

それから、町内のサインについても少しずつ整備が行われているが、例えば旭川空港であったり、道の駅といったところで、パンフレットを置けそうなところにも置いていなかったりしていたので、もう少し積極的に発信してほしいということ。

ジオガイドの養成制度についても、コロナ等の影響で、地域に関心がある方々が町を知るような形での研修会・学習会が中心となっている。来訪者が通年利用できるような体制にはなっていない。なので、引き続きジオガイドの養成をしてほしい。

また、黒曜石だけでなく、さまざまな興味深い素材が地域にあるので、そういった文化的資源も含めて、きちんとジオとのつながりを紹介できるツーリズムの構築をしてほしいということのリコメンドしたいと思う。

防災に関しても、あまり活動について触れられていなかった。ジオパークの役割として、防災・減災というのも加えてほしいと言及した。

あとは、国際黒曜石会議をぜひチャンスとして、しっかりとジオパークのネットワークにも働きかけをしたり、地域を巻き込んだ積極的な活動をしてほしいと伝えた。

前回までは事務局は課長が一人で頑張っていたが、ワーキングチームの方たちも一緒になってジオパーク活動を始めているので、運営上は改善されていると感じた。ただ、専門性に関しては、この地域は考古学の知見が大変充実している一方で、地質学の部分をもう少し補う必要がある。

今回行った調査員としては、グリーンを提案するものであるが、少し辛めに課題点を伝えていきたい。

補足があれば願います。

委員：私は6年前の再認定の調査にも行っており、その時も同様だったが、この地域はイエローとグリーンを交互に出す傾向がある。イエローが出た後に地域の方が関わって、良い基本計画ができたが、町としての職員が減ったりなどして計画通り進まなかったということもあった。ただ、6年前と比べると、現在町職員が担っている事務局への期待値はいい意味で薄れた。町に任せるのではなく、住民自身が関わって運営していかないとだめだという意識に至っていると感じた。特に、えんがあるジオクラブなど。なかなか町としてスタッフを充実させるのは難しいが、地域住民が関わるという形で回っていきそうだという感じを受けた。町の住民の関わりは6年前と比べると格段の進歩があると思う。

明るい話題としては、来年開催される国際黒曜石会議、これはアジア地域で初めて、ジオパークで初めてというイベントだが、自主的に手を挙げて選挙で選ばれた開催地ということで、町の方でもかなりやる気がある。ジオパークのみでは回せない規模ということで、町長の号令で全町を挙げてやるということになっている。これをうまくやっていただければ、ジオパークの事務局などだけではなく、町全体で動かすという契

機となると期待している。

国際黒曜石会議の開催に向けて、学術運営部会というローカルコミッティーを作っている。中心は考古学の専門知識を持った方が多いが、火山学などといった地球科学の分野の方、元専門員の方も入っているので、国際黒曜石会議の後にこういったスタッフがジオパークの中に位置づけられると、今問題となっている地球科学の専門家の不在を補えるのではないかと思う。明るい部分は確実に見えたと感じる。

委員長：今の報告について質問・コメント等あればお願いします。

委員：ここは南アルプスと最初にジオパークになりたいと手が挙がったところで、南アルプスはなかなかジオパークが難しいと思っていたが、この地域に関しては全く心配していなかった。というのも、こんなにもわかりやすい売りがあるジオパークって他にない。すごいものを持っているのに、その割には話が進まない。国際会議もするし、国宝にもなったので、いくらでもキャンペーンのやりようはあると思う。自分たちだけで考えていないで、三笠のアンモナイト博物館の成功例のように、周りにも手伝ってもらえば、元気が出ないはずがないと思う。

副委員長：その通りだと思う。役場の中の担当者が細々とやっていたのが、今回は民間のワーキングチームの方々、女性や物販の方など様々なアピールチャネルを持っている人が事務局の中に入ってきたので、そういった方々と一緒に、外向きの運営ができそうだという風を感じている。

委員：優秀な広報担当がいて、YouTubeなどで気の利いた紹介をするとブレイクできると思う。ただ、このジオパークは場所の問題もある。このジオパークは旭川から遠軽町の最短距離上にあるが、層雲峡に寄るルートで行く人が多い。だから人が来ないというところもあるので、町の地道な活動も大事だけど、そういったところはやはり広報の問題ではないか。

委員長：人材不足ということ。そのほかあるか。

委員：前回の指摘を見ると、予算のない中で知恵を出せということが一番言いたかったところだと思うが、逆に予算は十分に確保できているのか、それとも予算がない中で知恵を出してなんとかしろという状況なのか。

委員：ジオパークに関わる予算はかなりあるが、実際のところは埋蔵文化財センターとジオパーク交流センターの維持管理にものお金が掛かっている。スタッフの雇用も含めてそれ以外のところにこれ以上割くことはできない。人の入込客数といった成果が白滝側から見えていないというのが一番ネックになっている。現在いるスタッフの枠の中で知恵を絞るしかないのではという指摘になっている。

委員：昨年 JGN 事務局長と 2 人で訪問したが、その時の目的は専門員がいないというものもあるが、地域の強力なステークホルダーに事務局側が支援を要求できていないという状況だったが、それが今回改善されてきたというのを聞いて非常にうれしい。これが進んでいって、ステークホルダーがもっとジオパーク活動に主体性をもって関わってくると良いと思う。

委員：地球科学の専門員についてだが、ユネスコ基準だと必ず常時雇用するということになっていて、日本ジオパークはそれにならって活動を推進するということになっている。白滝ジオパークは前回は今回も指摘されているが、この点がクリアされていないというのをどのように解釈するかが悩ましい。前回の指摘ではかなり重要度の高いものだと思うが、その点はどうか。

事務局：現地調査報告書の中で、地学教育など地球科学に関連する知識を有するスタッフが存在すると書かれているので、それをどう見るか。以前他の地域でも、地学教育専門の方がいるのでその方が研究者とのつながりであったり、論文の解釈ができるだろうということで、地球科学の専門性を持った人材がそろっている、といった見方をされていたと思う。

副委員長：今回は役場のスタッフのなかに地学教育を担っている方がいて、埋蔵文化財センターの展示についても関わりあいながらやっているのではゼロではないと思うが、2 年間できちんとした雇用が生みだされると

いうのは実際には難しい。次の4年間でしっかり確保してほしい。国際黒曜石会議もその一つの契機になると期待している。

委員：先ほどの地学教育の知識を要する方は地元の方で、大学時代から関わっていたということで、かなり可能性があると思っている。

改善を求める点の中で「長期的な人事計画」といった表現で、少なくとも2~3年で改善していく。専門員の方も、今のポジションだと通常のサイクルで替わってしまう可能性がある。少なくともそれは避けてほしいということで指摘している。彼が専門員の立場に立つというのが今なしうる好手かもしれない。

委員：その専門員を常時雇用できるならそれも一つの対応の仕方だと思うが、例えば役場の中で地球科学の学位を持つ人をローテーションで回していくということでも、常時専門知識を持った人にアクセスできるということは満たせると思うので、雇用形態や誰が雇用するかといったことは地域側で考えていただきたいところ。一番大事なのは、常に地球科学の専門家がスタッフの中にいるということだと思う。

今の人がローテーションで抜けたときも、後に収まる人も専門性を持っている人を考慮してほしいといった事が言えるのであれば、ユネスコの基準はクリアできるのではないかと思う。

委員長：では、そういったことも含めて通知書の記述をお願いする。

ユネスコの基準を完全に満たすというのは国内のジオパークには要求していない。目標として提示するのは適切だと思う。他に何かあるか。

委員：確認だが、今後の活動の上でワーキングチームというものがコアになると思っていて、とても重要だとは思いますが、私が心配なのは、彼らの推進している活動がジオパークの理念・考え方に沿ったものなのか、それとも彼らがジオパークにとって良かれと思っていることを広めているだけなのかというのは大きな違いだと思う。それに関して手ごたえはどのような感じだったか。

副委員長：ワーキングチームの方々と話したうえで、報告書にも記載しているが、ジオパークの理念や白滝が目指しているものは理解している。その上で、事務局が、スタッフのメンバーとしてほしいエフォート20%位ずつ割り振っている。ジオパークの活動として位置付けたうえで動かれていますので、自分たちでやりたいようにやるとかそういった事ではなく、事務局の中でのジオパーク活動の計画に沿って進めるべきことは進める、それに加えて自分たちで強く打ち出せそうなものはしっかりと提案していく、そういった環境は醸成されていると感じた。

委員長：来年の国際黒曜石会議は非常に良い機会なので、うまく活用していただきたいと思う。

一点、実際に専門家以外の地元での活動の実績があるのか確認したい。例えば文科省のwebサイトでは学習プログラムの作成や利害関係者とのワークショップといったことを謳ってはいるが、そういったことは実際にやられているのか。

委員：国際会議では、一般向けのワークショップや講演会が予定されており、町内の方も参加できるようなオープンな部分を作っている。ポスターセッションでは、地域振興と地質資源に関するセッションも組まれていて、そういった形で今回の成果を町に還元できるような組み立てになっていると思う。

委員長：一つ気になったのが国際黒曜石会議の案内書の中で、「参加者はビニール袋一杯分の黒曜石のサンプルを採れる」との記載がある点。これはジオパークとしてはどうなのか。これだけコメントしたい。

委員：それと関係しているが、報告書の「地質・鉱物資源の販売 E-9」の中で、「過去に採掘した岩石を石器づくりなどの体験の材料として提供している」とあるが、これは在庫が尽き次第終了するという意味なのか、今後どうするのが気になった。この文面だと、現在採掘した鉱石も10年後には「過去に採掘した岩石」に当てはまるという意味か。これだと永遠に採掘する意味になる。それを確認したい。

委員：私も今のところは気になっていた。行程のところを読むと、「代替品としてガラス素材を考えていたが、

より高額なことが判明し課題となっている」とある。問題意識はあるのか。

委員長：リコメンデーションでこれを記載し、クリアしてもらおうということにするか。

副委員長：この点に関して、調査員としてはクリアしていると考えているのでリコメンデーションにはしていないが、念押しで指摘事項として書いてもいいと感じた。今はシカの骨を細工のマテリアルとして使っているということもある。

委員長：指摘事項に関しては全員の意見を反映させることができるので検討いただきたい。ここで採決を取る。

白滝ジオパークの再認定に反対の方は挙手をお願いします。

一同：(意見なし)

委員長：全員再認定に賛成ということで、議論を終了する。

【議題③ 日本ジオパーク再認定審査：八峰白神】

委員長：続いて議題③ 日本ジオパーク再認定審査の八峰白神に移る。報告をお願いします。

調査員：11月8日から11日まで2名で八峰白神ジオパークの再認定審査に行った。私の方から概要を説明し、委員の方から補足をお願いします。

八峰白神ジオパークは前回2018年にグリーンカードで、その時の指摘事項としては8点あった。いずれも解決済み、あるいは解決に向けて着手していることを確認できた。

組織体制については、前回の審査後に事務局が八峰町内に移ったこと、また、ジオパークガイドの会が組織されたこと、それに基づいて様々な部会が編成され、ジオストーリー等が策定されたなど、取り組みが進み始めた。

主な評価点では、解説書や看板、学校連携やジオパーク学習の推進、地域連携といったものも進み始めていることが挙げられているが、こういったことからジオパークガイドや事務局を筆頭に、学校や住民といったステークホルダーを巻き込んだボトムアップの活動が推進されていることを感じた。加えて、推進協議会のアドバイザーとして、有識者や秋田県立大学の先生2人を委嘱している。そういった方々が協力し、学術性を担保しながら進めていることも評価できる。

改善を求める点としては8点挙げている。ジオパークの領域の地質図の作成だが、通知書にも書かせていただいたが、地質図にサイトや河川の位置を示すことによって、地質と、各種遺産との関連性を確認しやすくなる。それにより、来訪者やジオパークを学びたい方の理解を深める工夫をしてもらいたいということ。他のジオパークの例を確認しながら、アドバイザーの皆さんで協議したうえで進めていっていただきたいと考えている。

2番目は、看板や解説版の図表を用いた管理とそれに基づく更新だが、看板に関しては多ければいいというものでもないが、設置をする中で利用者の動線を考えた設置場所と必要な数の選定をすること、記載内容に関しても、ジオパーク用語の説明、採取禁止の記載、ガイド申し込み情報、多言語対応、こういった内容も含めて掲載をしていくわけだが、どこに何かあってどのような目的で設置しているのか、現在の状況はどのようになっているのか、内容が古くなっていないか、そういった事項をしっかりと管理と確認をしながら進めていただきたいと思っている。

3番目は、海域への領域拡大の検討についてだが、これは世界ジオパークのほうでもトレンドとしてよく言われる話だと聞いているが、糸魚川ジオパークも9月の再認定審査の時に、海の方にも海産物や人とのかわりを物語るような価値があるならば、そこもしっかりジオパーク領域に含めることを検討しなさいという話があった。八峰白神ジオパークに関しても、ブラックサンドやビーチもそうだが、海に関わるジオサイトが多くあるので、それも踏まえて領域について再検討してはどうかという指摘。

4 番目のデータに基づく活動の評価については、ジオパークに対する意識調査、ジオツアーに参加した方へのアンケートなど、今後の指針とするための情報収集が必要だと感じた。説得力がある説明をするうえでデータは非常に有用であるし、可視化することでモチベーションにもつながるといふことでもあるので、ぜひ取り組んでいただきたい。

以上4点の指摘事項については、おおむね1年以内に着手ないし解決すべき課題。

5 番目の運営における地球科学的専門性の担保というのは、現在、事務局の中に地球科学分野の知識を持った職員が配置されているが、行政の人材なので異動する可能性がある。その場合どうやって補うのかといったことに対して、具体的な対策を講じていただきたいという指摘。

6 番目のネットワークや学会等での情報発信に関しては、東北ブロックや秋田県内でのネットワークで連携して事業を進めているが、せっかく全国で組織されている JGN や、先生方で組織されている日本ジオパーク委員会というしっかりとした組織があるので、そういったところと連携する中で事業を進めれば効果も上がるし、成果も出てくるのではなかと考えている。

以上2点の指摘事項については、おおむね2年以内に着手ないし解決すべき課題。

中長期的（4年以内）に解決すべき課題として、ツーリズムに関する事項を2点挙げている。コロナ禍ということで、思うように進まないこともあるのが現実。来年からの旅行業者と連携したツアーの予定も考えていると聞いたが、また感染者が増加している状況なので制約がかかってくるのが予想できる。ウィズコロナを踏まえた長いスパンの中で、新しいジオツーリズムも含めて考えてもらいたいということで指摘事項に書いている。

報告の概要は以上となる。

委員長：調査を担当した委員から何か補足があればお願いします。

委員：報告感謝する。補足は特にないので、質問があれば回答するのでよろしくお願いします。

委員長：今の報告に対して、質問、コメントはあるか。

委員：改善を求める点の3つ目の海域への領域拡大の検討についてだが、実際に現地の方々は領域拡大に積極的なのか、それとも世界ジオパークの流行に乗ろうとしているだけなのかを確認したい。

委員：現在のジオパーク活動の中で、ジオガイドの海岸沿いの解説に海域の要素が多く含まれている。ジオパークの活動として彼らは海域への領域拡大に積極的なわけではないが、無意識に海域について語っているということ。

この地域の八森町ではハタハタ漁が重要で、文化・生活・歴史に深く根付き、誇りとなっている。

他にも、特に重要なコンテンツとして世界遺産・白神山地の水のストーリーがあるが、水を語る上で白神山地の西側斜面から流れてきた水が最終的に海につながる。このストーリーの最後のゴールの点が抜けてしまう部分や、海のアクティビティ、磯の話が抜けてしまう。そういう活動をされているのに、ジオパーク活動に結び付けられないというのは大きなデメリットではないか。JGCとしては、海域を含めなさいということではなくて、まずは地域の方が自主的に海域の重要性に気づき、議論を始めて、海域を含めるメリットを感じた場合は海域を広げることを検討してくださいというような形で、通知書には書き込ませていただいている。

委員：承知した。

委員長：その他はあるか。

委員：八森町の観光マップを見ると、八森岩館県立公園は海域も含むように設定されているので、ジオパークとして海域を入れないというのは逆に不自然だと感じた。

委員長：気になったのは、ホームページを見ていると、ジオサイトに文化サイトと自然サイトを含めているの

で、混乱しているように思えるがそれは現地では区別できているのか。

委員：事務局では区分できている。以前はブルー、グリーンとサイトを色分けしていたが、今はその考えは全くなく、一般的なジオパークという形で考えている気がする。

委員長：そのあたりも確認するように通知書に記載するようにお願いします。

その他はあるか。

委員：海域についてだが、通知書には緊急に着手ないし解決すべき課題に、非常に緊急性を要する課題のように書かれているが、もう少し長めの視点で位置づけたほうがいいのではないか。

委員：承知した。審査後引き延ばさずにすぐ話し合いを始めてほしいという気持ちで書いたので、今後4年間の中で長期的な目標として進めてくださいという書き方でも構わないと思う。

委員：承知した。

委員長：それなりに進歩しているように思われる。

先日会長が逝去されて、体制も変わる可能性がある。そのあたりも気になるころではある。

委員：通知書の中長期的に解決すべき事項の中に、「美味しさの秘密を科学的に明らかにする」という指摘があるが、これを4年以内に解決するのは難易度が高いと思う。これは例えば環境的側面や地域性などをクローズアップしてくれという事だと思うが表現の修正をしたほうがいいのではないだろうか。

委員：承知した。

委員長：採決を取る。再認定に反対の方いるか。

一同：(意見なし)

委員長：全員再認定に賛成ということで、議論を終了する。

記者発表資料作成

【議題④ 日本ジオパーク再認定審査：苗場山麓】

委員長：続いて、議題④ 日本ジオパーク再認定審査の苗場山麓に移る。報告をお願いします。

委員：調査員2名で調査へ行ってきた。私たち2名の提案はグリーンカード。前回指摘された事項は詳しく見ると14項目ある。△と×の項目を中心に説明する。

まず1つ目、プロモーションの展開については、ジオツーリズムのコンテンツはあるので、それに対してマーケティング調査に基づいてwebサイトやSNSを活用した情報発信をすべきという指摘だった。これに対する回答が、YouTuberが動画配信をしたり、インスタグラム等による情報発信は十分行われているが、残念ながらこれはマーケティング調査に基づいたものという観点からいうと対応できていないということで△にしている。

3つ目、基本計画・行動計画およびパートナーシップ、マーケティング、プロモーションの各種戦略の策定に関しては、これは出来ていない。具体的に出来ていないのは何かというと、基本計画とパートナーシップの戦略の策定が出来ていない。行動計画はある。行動計画については、4年間の中期計画を作り、それに応じて協議会としての活動を推進していくということになっている。ただ、苗場山麓ジオパークとしての基本計画はなく、各町村の総合計画にジオパークは乗っかっているという状況。厳しく言えば、「ジオパークとしての基本計画」は出来ていないということになる。

4つ目の事務局機能の継続性の確保については、今の推進室長が定年退職しており、再任用という形で雇用している。現在拠点施設として「ジオカル(仮称)」を建設中で、2年後の竣工を目指しているが、室長は

それまで継続する意向。その後は未定となっている。その後の体制について継続性が確保できていないと判断した。ただ、スタッフには若い世代もおり、後述するが会長からも前向きな発言があったことから、この項目は何とかクリアできるのではないかと考えている。

9 目、文化遺産・無形遺産のリストの作成とそれらの活用について、その他の遺産という項目で、自然遺産それから文化遺産、無形遺産に関するリストを行政が認定するようなもの以外に、ジオパークとして独自の価値を見出してリスト化しようということ、これはユネスコのほうでもチェックされるようになっているが、苗場山麓では、有形遺産と自然遺産に関してはこれをクリアしている。無形遺産に関してはリストがないので、これも作りましょうという指摘。

10-2、八峰白神は実際に地震被害のあったエリアとして、リアルタイムで活断層や震源情報を確認できるようなシステムの導入をすべきだが、これはまだできていない。しかし、これから整備される拠点施設の中に防災科学技術研究所の「地震だねっと！」を導入する予定。

11 番目以降については、特にこの地域を良くするためのリコメンデーション。まず、ジオパーク活動がもたらした効果の測定の検討。これは個人的にも非常に難しいリコメンデーションだと思う。これについては、プログレスレポートの内容も正直ピント外れの報告がされている。ただ、ジオパークを継続したことによって起きた地域の変化は確認できたので、それに関しては主な評価点の方で併せて紹介させていただく。

主な評価点としては、苗場山麓ジオパークは、事務局の形態が不思議で1つの場所に事務局スタッフが集中してやっているのではなく、津南町と栄村にそれぞれ拠点があり、相互的に連携して活動を推進しているという特徴がある。役場の中に連絡調整会議のようなものがあり、ジオパークの活動が各役場に共有される仕組みが非常によく機能している。所管は教育委員会だが、観光、農林といった他の部局にもジオパークの活動が共有されている仕組みが出来ているので、2拠点制でも非常にうまく回っている。

また、地元の方がジオパークに関わりだしたという点も評価できる。もともと教育活動が良かったが、そこにボトムアップの形で地域の方が積極的にかかわり始めた。特に部会の活動が非常に活発。地域住民のアイデアがジオパークを通じた地域づくりに直接反映されるような活動が根付いている。

良い点の地域の変化についてだが、教育活動を継続したことにより、小学校の時にジオパーク教育を受けた高校生が、母校の小学生に自ら作成した防災教育プログラムを提供するという変化があった。これはジオパーク活動を続けてきた地域の良い変化の例だと考えている。

また、ここはジェンダーバランスがよくない。会長が女性ということは大きな意味があると思うがジェンダーバランスは特に良いわけではない。ジオパークに関わっている女性職員が作った認定商品のチラシが非常に良い出来で、これに関しては大きなポイントになると思う。

改善を求める点については5つ挙げている。

まず1つ目は、前回も指摘があったにもかかわらず作成されていない、苗場山麓ジオパークとしての基本計画を作成してほしいということが一つ。

2つ目は、ジオパークという文字の視認性の向上、ビジビリティの部分について。看板については作られているが、ジオパークに関わる人が増えてきた一方で、ジオパークを意識した情報の発信に欠ける傾向がある。具体的には、チラシにロゴマークが入っていないなど。すぐに改善できるところはすぐにやってほしいという意味で書いた。

3つ目はジオガイドの質の向上。いいガイドもいるが、一方的に話し続けてしまうガイドもいた。原因はわかっていて、ガイド養成講座と、いわゆる社会教育事業というのが明確に切り分けられていない。なので、ガイド養成講座については、きちんと特化した仕組みにしていくべき。教育活動はできてきているので、今度はツーリズムに打って出てほしい。そのツーリズム体制を整備する上で、ガイドの質や、ビジビリティ等

を向上させていく段階に入っているということを今回は伝えたいと考えている。

4つ目はまさにその観光部局の体制強化の検討について。今の室長がいなくなった後どうするのか。観光に関する専門家を組織の中に入れるフェーズに来ているのではないか。これは会長ヒアリングの中でも直接おっしゃっていた。そういった意識があるのであれば、ぜひ早い段階で観光の体制づくりを整えてほしいという意味で、あえてリコメンデーションに含めている。観光をやるのであれば、当然ブランディング戦略やマーケティング戦略が必要となるので、そういったことも併せて検討できるようにスタッフの体制強化にも臨んでほしい。

5つ目は看板の内容の再検討について。また、この項目に加えたいのがマップの作製。プログレスレポートを見てもわかるが、マップが非常に見にくいというのにエリアが切れている。少なくとも2年後に拠点施設をつくるのであれば、その拠点施設にはツーリズムを意識した、きれいなマップの設置をお願いしたい。

なので、拠点施設の整備に併せて、エリアをきちんと示せるような、またサイト情報をきちんと記載した見やすいマップをぜひ作り直してほしいということのリコメンドしようと考えている。

また、解説看板については、初期につくられたものには観光客を意識できていないものが多い印象があった。重要度かつ利用頻度の高いサイトについては、設置されている看板の内容を精査し、わかりやすいものに修正していったらどうかという提案をしようと考えている。

補足があればお願いする。

委員：教育をベースとした地域に根差した活動は高く評価できると思う。先ほどの報告にもあったが、これからはツーリズムにジオパークを活用するという段階。実は、このジオパークは地理的に交通の便が非常に良い場所。首都圏からだると上越新幹線の越後湯沢から降りて、北陸新幹線の飯山駅に挟まれた所。そういった長所を活かすという意味でも、ツーリズムに打って出る時期だと感じている。

看板等の整備が難航しているのは、おそらく専門員が本当の地質のプロではないということがある。プロであれば、素人向けに上手に情報を丸めて表現できるが、そうではないため、正確に描かないといけないという意識が強いのではないかという印象を受けた。今の方も一生懸命やられているが、本当の地球科学の専門員がいれば、看板等の整備も進むのではないかと思う。ただ、これは他からのサポートでカバーできる場所だとも思う。

委員長：報告感謝する。私は、ここはビジビリティが非常に低いという印象。中身は活発に活動しているので、それがここのネックかなと思っている。質問・コメントあればお願いする。

委員：もともとの事務局の体制で、津南町の方が前面に出ている印象があるが、栄村の方でも人の入れ替わりなどは担保されているのか。

委員：栄村にも担当がいて、ジオパークに関する取り組みを行っている。正直、津南町の方が人員体制にしても人の充て方にしても中心になっているのは間違いない。ただ、運営体制の中でも役場の中に情報を通す仕組みがある程度機能しているので、人の入れ替えがあっても栄村に関してはある程度情報が行き渡る。それは役場が小さく職員が少ない分、逆に情報が共有しやすい。そのあたりの関わり方の差は室長も気にはされていた。栄村をもう少し活動に巻き込めないかとの話もあったが、予算や人員の関係で実際には難しい。「それならば、地元の方々に直接かかわってもらおう」という図式が出来てきた。栄村に関しては、自治体としてのかかわりは弱いかもしれないが、地域の人の巻き込みに成功しているという点で活動がカバーできていると判断した。

委員長：ジオカルとは何か。

委員：ジオカルは新しく建設予定の拠点施設。現在の「なじよもん」という考古系の施設に代わる、統廃合で無くなった小学校をリノベーションして造る新しい施設。二年後の完成を目指す。文化庁等の予算を使って、

文化財センターとしての機能を持たせる。ジオカルの「カル」は「カルチャー」からきている。二階が文化財の保護と価値を発信する拠点、一階をジオパークの情報を発信するスペースとして活用する。これに関しては別予算を充てて造ることになる。文化財の価値とジオパークの情報発信が一つの建物でできるようになる。計画もほぼ作って動いている。所在地は津南町。

委員長：見せ方に問題があるジオパークだと思う。エリアがどこなのかがわかりづらい。唯一見つけたホームページがJGNのページで、そこで初めてエリアが表示されている。

委員：とにかくマップに関しては早く作ってもらいたい。

委員長：他にあるか。

委員：専門員の方が元小学校の教員の方とお聞きしている。活断層学会で「活断層オンラインワークショップ」を5回シリーズでやっているが、その専門員の方が信濃川の活断層などいろいろあるので、ジオパークのコンテンツにしていきたいので勉強するとおっしゃっていた。一生懸命やっているという印象を受けた。

一方、もともと秋山郷という地域なので、「苗場山麓」と呼ばれると多少違和感がある。私自身新潟に勤務していたので、長野県と新潟県にまたがる地域だが、一体として捉えられているという感覚がある。名称としてちょっともったいないなどは思っている。

委員：それに付随して、ガイドの質についてコメントをしたい。地域の子供たち向けに非常に良い活動をしているのはわかるが、例えば我々のような他所から来た者に対する説明の中でもいきなり固有名詞を使っている。地名や川の名前など土地勘のない人にとってはわからない。そのうえ地図なしで説明する。ツーリズムとして活発化させていくためには、他所の人にもわかるような情報の伝え方をしていく必要があるということコメントした。

改善策として代表的なものはやはりマップ。そういったところの整備をしていくともっと良くなっていくと思う。

委員長：その点は通知書には記載してあるのか。

委員：今気づいたので追記しておく。最後の解説版の内容のあとに加筆させていただく。

委員長：お願いします。

その他はあるか。

委員：観光部局の体制強化とあるが、現在の観光部局はどういった位置づけになっているのか。

委員：所管としては教育委員会になるが、実は協議会の中に観光のセクションも含まれている。教育委員会の所管でありつつ、観光活動はしている。具体的には、津南町の観光地域づくり課、栄村にはそれに準ずる危機管理課が組織として入っている。その方たちが認定商品の作成、ツーリズム・ツアー造成といったことを行っている。そういったところに新しい人材を入れていくタイミングが来ているのではないかと会長がおっしゃっていたので、それはぜひやってほしいということのリコmendしようと考えている。

委員：前回審査に行ったが、今回の報告でその時からのプロGRESSがみられてよいと思った。私からJGCに対して提案させていただく。

女性の役割の分析で「現会長はJGNの中において、全国のジオパークに対して女性ならではの視点を発信し続けている」といった評価をしていたり、女性の能力を性別と結び付けて評価するジェンダーバイアスが見受けられる。JGCとしてジェンダーに関する学習が足りていないと思う。提案としては、JGCとしてジェンダーに関する研修会の開催をお願いしたい。

委員長：重要なポイント。

では、採決を取る。グリーンで行きたいと思うが、反対の方。

一同：(意見なし)

委員長：全員再認定に賛成ということで終了する。

【議題⑤ 日本ジオパーク再認定審査：萩】

委員長：引き続いて萩。報告をお願いします。

委員：まず、前回の指摘事項から見ると基本的にクリアされている。事務局体制を維持してほしいというのがあったが、1人事務局員が減ったが活動に支障はない状態。

萩ジオパークはなかなか面白くて、審査の最初に私たちはこういう方針でやっていて、この数年でここまでできたという話から始まって、非常に戦略や理念がしっかりした活動をされている。最初の2年では教育をきっちり行うこと、それから、ジオパークの理念を理解した仲間を作ることに重点を置いている。例えば、地域内の説明板などでジオパークの名前を売ることは重視していない、もちろん必要な説明板は作るけれどもまずパートナーを作るということを重視している。ガイドの養成についても、例えば「ジオロジー」や「エコロジー」等の話しをしない。ガイドの手法と、ガイドが何をするのかということをお教える。コンテンツに関しては誰でも参加可能な別の講座で学んでもらうということをやっている。ガイドと並行して、ジオプランナー講座というものもやっていて、「ツーリズムを企画できる人」を育てることも同時にやっている。それぞれの講座で育てた人材を合わせて、昨年萩ジオツーリズム協会を作った。これからのジオツーリズムを担うことになるという説明を受けた。モデル的にジオパークが主催しているツアーもあり、オンラインでも行われていた。大変面白いものになっている。これから様々な活動が広がる段階にきている。

宿泊施設や移住してきて地元でツーリズムに携わろうとしている人々に関して、きちんと理念を理解してもらったうえでパートナーにするということをやっている。条件としては、前述のさまざまな講座を受けることに加えて、萩ジオパークにどのような貢献をするか、という宣言を表明することでパートナーになれる。

現在様々な講座やツアーを行うことが、年間80~90万円が協議会の財源にもなっている。

ご存じのようにJGNにも様々な貢献をしている。

今後の課題としては、前述のように土台ができてきているので、実際にツーリズムや教育を広げていくという段階にきている。そういった観点から提案させていただいている。

委員長：質問やコメント等あるか。

副委員長：以前認定の際に行ったが、とても良い組み立て方をしているということは分かった。

事務局の体制について、これまで萩市の方々が中心となって事務局を回してきたと思うが、新しく入った阿武町の貢献具合はどうか。

委員：そこは少し問題で、阿武町の方が協議会の副会長になったり、お金を出したり、会議に参加したりと組織としてはできているが、萩市と比べると阿武町の活動はそれほど活発ではない。ジオパークの民間のパートナーは阿武町にもいるのでそこから広がっていくとは思っている。

副委員長：事務局体制については、阿武町の職員の方も入れていく必要があるのか。

委員：そこまでまだいかなないので、リコメンデーションには活動を広げてほしいと記載している。

委員長：体裁のことを言うと、ジオサイトマップはホームページにはないが、一覧はあるのか。

委員：あるはず。内部向けのものは確認した。

委員長：エリアについても、ホームページで海域について表示がない。

委員：マップは存在しているし、現地では説明板などにも表示されている。

委員長：海域の線引きの仕方については、修正する方向で検討していただいた方がよい。

委員：それについてはいろいろ議論をしたが、その場で結論が出なかった。他にも海域については議論しているジオパークがあるので、そういったところとも議論して、JGNの中で4年ほどで考えていったらよいので

はないか。

委員長：見島の北に浅瀬があるが、そこもジオサイトに変えている節がある。そこも含めるのであれば、「水深何メートルまで」など厳密に決めてしまってもいいのではないか。

事務局：午後にでも議題にさせていただきたいと思っているが、海域についてはこれまで JGC が認めたのちに訂正させる場合、それがエリア拡大 10%以上になる場合どう扱うかを一度議論していただきたい。萩については今後検討が必要ということで大丈夫と思う。

委員長：午後の議題に追加する。

他に質問・コメントあれば願います。

委員：既存の文化財に関するガイドの方がいて、そのあたりの扱いが少し難しいと感じられたと思うが、ジオパークのガイドと両方兼ねている方はいるのか。

委員：あまりいないと思う。もともと修学旅行の学生がたくさん訪れるところなので、そういった人たちに対応するガイドがすでにたくさんいる。「ジオパークのガイドの存在感が大きくなったら影響を及ぼしていきたいが、今は何も口出しはしていない」と言っていた。リコメンデーションにはぜひやってほしい、影響を与えてほしいと書いている。

委員：文化的な価値が高い地域なのでもったいない。

委員：その通り。ジオパークのツアーと修学旅行のツアーでもコースが被っている部分がある。修学旅行のツアーが来たときにもガイドは次々説明していくが、子供たちはかわいそうだった。

委員長：その他に特になければ採決を取る。再認定に反対の方はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：全員賛成ということで終了する。

記者発表資料作成

【議題⑥ ユネスコ世界ジオパーク審査準備状況：アポイ岳】

委員長：議題⑥ ユネスコ世界ジオパーク審査準備状況ということでアポイ岳。委員願います。

委員：プログレスレポートの内容は夏の審査の時に提出されたものと比べて改善がみられる。その点は良かった。その一方で、実績の記載が実施した事業が羅列されるだけとなっており、評価分析が十分でない点が散見されるので、そこは書き込みが必要かと思われる。事業の予算に関してはかなり減額されており、その背景・理由の説明の加筆、あるいは現地での審査のタイミングでプレゼンテーションすることが必要。

現在のスタッフ案のところでも、本当に雇用関係があるかということを確認してから載せた方がいいと思う。

あと問題なのは、夏の調査の時にも話したが、指摘事項に対する対応が不十分。書類は整っているが、実際のパートナーシップや、「来年の審査までには完成している予定」と書かれている項目などがあるので、それらに関して再審査までに理解と議論をして、実際に実行できるかの判断が大事になってくると感じている。

そのあたりは直接アポイとお話しされている委員長の方が詳しいと思う。情報共有をお願いしたい。

委員長：2 回面談をした。プログレスレポートの内容についてはではないが、今の体制についてや、協議会としての判断などが(町と)全く区別できていないということは指摘した。

事務局：継続したいかどうかに関しては一応続けたいと言っているが、議会と話をすることには先月な

かばの時点でまだ至っていない。今年中は見込みが立っておらず、来年1月に頑張りたいと言っていた。
委員長：指摘事項の対応について、指摘事項の誤解をしているように感じられる箇所が散見される。インベントリーを作りなさいと言っているのに違う事をやっていたり、パートナーシップの基準を作れというのをジオパークの概念に沿って変な回答をしたり、少し気になるところ。

その他、何か気付かれたことがあればお願いしたい。

事務局：最初の地図だが、ゾーニング入りの地図について、今回カOUNシルでゾーニングなど余計なものを書き込むと、シングルエリアとして一つのまとまったジオパークであるということが分かりにくくなる、誤解を招くという話があった。ここにいきなりゾーニングの地図を入れても意味がわからないので差し替えてはどうか。

委員：その通りだと思う。

加えて、海域にジオサイトがあるにもかかわらず海域をジオパークのエリアに設定していないという問題もある。そのあたりは夏の審査の時にも指摘しているが、各種、調整が必要なので調整中だとの回答だった。これがどう動いているかというのも課題の一つ。

地図についても指摘はしたが、地図自体を描ける人がいないのではないかという感じがしている。そこは調整が終わったものを少し協議したほうがいいと思う。

委員長：あと予算が気になる。財政がだんだんと厳しくなっているように見えるが、そこは大丈夫か。

委員：手元の資料だとすぐには確認できないが、アポイ岳保全調査費が5年間、国の予算から出ていた。それがなくなったのでかなりの減額に見えている。説明を文書として書いておく必要があると思う。

委員長：そのほかなければ次の報告に移ろうと思う。

【議題⑥ ユネスコ世界ジオパーク審査準備状況：洞爺湖有珠山】

委員長：引き続き洞爺湖有珠山。委員、お願いします。

委員：提出されたプログレスレポートを拝見した。前回のリコメンドの中で、国際的価値をもう少し発信した方が良いということを確認したところ、現行の状況としてはきちんとジオロジカル・バックグラウンドが明確に書かれており、改善が見受けられる。

それから、審査の中で大きな課題になりうると思われた、常勤の地球科学者の雇用に関しても、新しい人が決まったようで、名簿にも反映されている。ただ、嘱託というかたちにはなっている。なので、24時間365日、地球科学に関することを相談できる人材が組織に入ったということは洞爺湖有珠山にとっては大変追い風になると考える。

もう一つ、「減災文化」という名前を使って、「防災を通じて火山と共生していくのがこの土地のアイデンティティである」ということを念頭にマスタープランなどを作ってきているので、それが伝わるような書き方にしてほしいとリコメンドしたところ、それも洞爺湖有珠山の文脈できちんと描かれている。ネバド・デル・ルイスの件についても詳しく書かれているので、個人的には内容としては十分なプログレスレポートだったと思っている。

事務局：洞爺湖有珠山には9月のユネスコ世界ジオパークカOUNシルでエリア変更が認められている。通知書を正式に受け取っていないという理由だと思うが、その状況について書いたうえでリダクション予定のエリアをわざわざ地図に載せている。もうこれは必要ないと思うので、差し替えをお願いした方が良いと思う。

前回のリコメンドーションについて、一文目にリコメンドーションの趣旨をまとめている。それは文として整備されていてよいと思うが、表現が” This recommendation is intended that ~.” となっていて、勝手に意図を決めつけている感じがするので、「私たちはこう理解した」というような言い回しに変えた方が

いいのではないか。

委員長：では、そのように変更をお願いしたい。

その他あるか。なければ次にいきたいと思う。

【議題⑥ ユネスコ世界ジオパーク審査準備状況：室戸】

委員長：次、室戸。報告を願います。

委員：最初に提出された報告書を読んだときは大丈夫かと心配だったが、だいぶ改善されていると思う。ただ、一つ一つの指摘に対する回答部分を読んでも、例えば海域への領域拡大について以前のように「結論付けた」と書いておらず、「今後検討を続ける」とは書いてあるものの、あまり乗り気ではないと感じられる表現を使っている。

また、ジオパークセンターの展示についても、「日本全国のジオパークを集める」といったことが強調されているが、やはり室戸は世界ジオパークなので、世界ジオパークとしてのプライド、役割といった視点を強化していく必要があると感じた。

また、日本語版が25ページであるのに対して英語版は24ページということで、英語の方が一般的には長くなると思うので、内容が完全に一致しているかどうか確認が必要だと思う。

委員長：何かコメントはあるか。

事務局：もう一度後で確認するが、25ページで合っている。英語版は24ページで収まっているので分量的には24ページでも足りるのかもしれない。全体的にファイルサイズが大きいので受け取る側から配慮がないと思われぬように工夫してもらいたい。

また、3地域とも表紙の年がずれていたり、アポイ岳は古いロゴのままだったりするので、ページ数も含めて体裁に関しては最終確認をしたいと思う。

委員長：室戸ジオパークの再審査では明らかに海域について言われるのは間違いない。

他にコメント等なければここで終了とする。1月末に提出なので、JGCからの意見はできれば今年以内にお願います。それを受けて各地域が直し、それを中旬位に関係省庁に送り、確認していただくという作業となる。

【議題⑦ JGC プロGRESSレポート・現地調査報告書 様式の一部変更】

委員長：議題⑦ JGC プロGRESSレポート・現地調査報告書様式の一部変更について事務局をお願いします。

事務局：現地調査報告書（ミッションレポート）のPROGRESSレポートはユネスコのものと同じ様式で書いているが、最後のE.8、E.9の後にE.10として、防災について日本は特出しが必要だということで追加している。しかし、この内容は「Climate Change」のその前のところで書く場所があるので、重複をなくすためにもここは削らないかという提案を委員からもらっている。この会議で決定していただければと思う。

委員長：審査に行かれた方は分かると思うが、E.10はもともとユネスコのレポートには含まれていない。日本が勝手に入れた項目。これは『E.2.4 気候変動及び自然災害への関わり』と重複するので、あえてE.10を残す必要はないと思う。そのような理解でよろしいか。

一同：（意見なし）

委員長：それではこのように変更する。

【その他確認事項】

委員長：カウンスル会議で、特に日本の審査について出た課題について相談したいというのと、もう一つは先ほどあった海域の考え方について。この2点以外に何かあるか。山陰海岸のイエローカードについて、今後どう委員会として対応・アドバイスしていくかということが話題の中心となると思う。

まず、山陰海岸も含めて全体のカウンスル会議の日本への審査について。事務局願います。その後に傍聴参加した委員に補足をお願いする。また、文科省からもコメントをいただければお願いしたい。

私はカウンスルメンバーだが、実はこの審査には一切関われなかったので、何が議論されたのか詳細をよく理解していない。

事務局：本日の会議の冒頭で委員長から報告いただいたように、12月7日から9日にかけてオンラインで第7回ユネスコ世界ジオパーク・カウンスルの12月セッションが行われた。9月に行われた9月セッションとまとめて第7回カウンスルということになっている。この12月セッションでは、今年9月・10月に遂に現地審査が実現した再認定対象の6地域の日本のジオパークと、新規申請中の白山手取川について審議された。

まず、白山手取川については、ユネスコ世界ジオパークに認定するという事で来年春に開催されるユネスコ執行委員会に勧告されることが決まった。これはまだ最終の正式な発表、認定ではないということの注意書きを付けて、委員会としてはホームページにユネスコの発表があった後に発表する予定で準備をしているところ。

また、白山に関しては議論もかなりあっさり終わり、すごく良かったのは日本ジオパークとして11年も経験してきたということが非常に評価されていた。そういったことで、経験も積んできているし準備もしっかりしてきているが、課題としては年間来訪者数が500万人もいるということで、インパクトアセスメントをしっかりしているのか、バランスよくサステナブルなカタチでツーリズムを進めていく必要があるということのリコメンデーションに書かれると思う。

あとは、地図がおかしいという指摘がミッションレポートに少し書かれていた。それは委員長と私が現地に同行していたので何のこともよく分かっていて、白山手取川ジオパークには3つのゾーニングがあるが、それをエリア別に地図上に点線で丸く囲って表現していた。それがわかりづらい、この地図は絶対だめだということを現地に来られた方からアドバイスされていた。

ミッションレポートでは多分それを意図して書かれていたが、カウンスルの皆さんが地図に注目をするようになって、ミッションレポートに掲載されていたその地図ではなく、別の地図についてもやはり混乱をまねくので、ゾーニングはいらないのではないかなという意見があった。

また、行政界がどこなのかがこの地図だけではわからないという質問があったが、本文の表記と組み合わせてみたら、ユネスコ世界ジオパーク候補地の境界と一致していたので問題なかった。議論といってもこの程度だったので、あっさりしていた。

次に糸魚川、島原半島、隠岐、伊豆半島、阿蘇の5地域もあまり時間がかからずに終わった。地域によっても違うが、特に島原半島と伊豆半島は、ジェンダーバランスが悪いという指摘があった。島原半島に限っては、協議会も事務局も両方ジェンダーバランスが悪いと言われていた。

ジェンダーバランスは、ただ単に男性・女性の数の比率の話ではなく、意思決定権のあるポジションに女性が少ないということが問題ということが何度もカウンスルの間で出された。

島原半島は、地球科学者が少ないということを指摘されていた。このジオパークは10年も続いていて、力がある地域なのでもっと期待したい、チームビルディングを強化して地球科学者を増やすべきという意見があった。

隠岐は、ネットワーク活動にリコメンデーションが入った。これに関しては、隠岐はアイランドワーキンググループのリーダーも務めている、日本で一番アクティブな地域だということをGGNの会長が熱弁し、ネ

ネットワーク活動が活発だと理解されていた。

阿蘇に関しては、事務局長が変わったが、最近いろいろなところで顔を見るというポジティブな感想をいただいていた。あっさり終わった。

山陰海岸の話に時間を割きたいので、ここまでの内容でいったん委員に補足をお願いしたい。

委員：あまり補足できるところはないが、糸魚川としては、「問題とされているところはない」として、一覧表にも「なし」と書かれていた。

海域に関しては、審査員が糸魚川と島原半島に海域が必要か検討してくれということ推奨事項に入れようとしていた。それに対して、長年やってきたエリアを簡単には変更できないので、推奨事項に入れるかどうかは少し議論があった。

島原半島に関してはネットワーク活動がまだ弱いので、ワーキンググループに参加するなど、APGN 以外にも世界中のジオパークと協力してほしいということと、マネジメントについてはジェンダーバランス以外にも若い世代が関わっていないことが指摘された。

隠岐に関しては、先程の話しにもあったようにネットワーク活動をやっていないのではないかと指摘があり、前回の 2017 年の指摘事項でもネットワークの強化が挙げられていたことから、「前回と同様の指摘があるということは解決に取り組んでいないということではないか」と言われたが、GGN 会長が実情を伝えてくれたので、その指摘事項はなくなる可能性がある。

阿蘇に関しては一つ質問があった。鍋ヶ滝でオーバーツーリズムの問題があるのではとの指摘があった。

事務局：オーバーツーリズムがあることは事実だが、対応を始めているということが確認され審議が終わった。

委員：すでにほぼ話しに出ているが、糸魚川の海域拡大の問題については、拡大してくれということではなく、”consider about expanding” という感じのリコメンドをするという話になった。

委員長：続いて文科省からもお願いしたい。

文科省：私は今回初めてカウンスルに参加させていただいた。事務局からも指摘があったが、白山手取川の地図の描き方で、行政区画と一致しているかということがかなり議論に時間が割かれていた。それを今後出す書類でも工夫してもいくと、カウンスルでの議論もスムーズにいくと思ったところ。

山陰海岸については、今後どういう風に対応していくのかといったところは少し検討が必要だと感じている。この後議論していただければと思う。

事務局：白山手取川に関して一つ伝え忘れたことがある。MAB 計画のことはやはり言及されていた。PR とパートナーシップ・アグリーメントがあるのかどうか曖昧になっていたため、最後の審議の後にコメントできる時間をもらったので、私と白山手取川ジオパークのスタッフから少しずつ話し、アグリーメントはあるということはお伝えした。それがしっかり伝わってなければ、リコメンデーションが入る可能性もあるし、相乗効果をもっと求められるところだとは思っている。

委員長：では続けて、山陰海岸のことについてまず報告をお願いする。

事務局：今回、再認定については、他の国の分も含めてイエローカードは山陰海岸の一件だけだった。山陰海岸については、3 日目の 3 時間半のうち、1 時間かけて審議された。

玄武洞の近くで石の販売が行われているということは、今回 JGC の審査事前確認でも確認していただき、助言もあった。プログレスレポートでもそのことは触れていたが、現地に来られた時には実際には見てはいない。そのあたりは現地審査同行された委員が補足してくれると思う。「販売はどこでやっているか」、「あの建物は何か」ということが話題となり、確認をしていただいて、写真等で説明したものがミッションレポートにしっかり書かれていた。それを元に、「世界の地質百選」にも選ばれた玄武洞のすぐ近くで石の販売が行われているということはガイドラインの基準に抵触することだが、運営団体が直接やっているわけではない。

にイエローカードでよいのかという意見の方も少数いた。直接やっていたのであったらこれはレッドカードだが、直接やっていなくとも、緊急課題なので2年待っているのも長い。途中で進捗報告をしてもらわないといけないし、全員でサポートしていかなければいけない問題だということを時間をかけて議論された。

その議論の中で、ガイドラインに書かれていて、なおかつリニューアル（「新しく出来た」と解釈されていたが）、新しいミュージアムの中で石が販売されているということは緊急に解決されなければいけないという話や、今まで何度も来たことがある方が、「これまで聞いたことがなかった」と驚かされていた。

山陰海岸はスタッフが短期間で入れ替わるので、キャパシティ・ビルディングがそもそも足りないため、基本的な理念が理解されずこのようなことが起こっているのではないかとというような指摘もあった。

この場合のイエローカードはパニッシュメントとして捉えられるのではないかと心配される声もあったが、これはサポートするためのシステムなので、決して罰を与えるためのイエローカードではないという話が1時間ほど続いた。

結果的にはイエローカードに賛成の方が多数で、棄権された方が1名、グリーンカードの方が1名ということで、イエローカードに決定した。

委員長：以上報告だが、現地審査の状況についても願います。

委員：現地でどういう議論があったかということをお話します。

まず、10月10日にガイド説明が現地であった。その時に局長から直接、エリアの中で地質資源を販売している業者がいることに言及した。おそらく山陰海岸ユネスコ世界ジオパークの過去の審査の中で初めてではないかと思う。その中では、この行為がUGGpのクライテリアに抵触していることを認識していると言った上で、館の売り上げを維持するために別のものを売り始めたという説明をした。実際に何を・どこで売っているのか、その販売行為についてどう対応してきたのかということ事務局が説明をした。その説明については、業者へ働きかけをしているがなかなかやめてもらえないといったことで、今後も対応は続けていくとした。これには協議会も関連はないということで終わっている。

ただ、同日そのあと夕方に玄武洞公園に行って、実際にミュージアム前も通ったが、訪問時間が閉館時間を過ぎていたので中に入れなかった。審査員の方々にミュージアムはどこかと聞かれ、あそこだという説明をしたが、事務局の立場ではないので場所までしか説明しなかった。結局、事務局としては、玄武洞公園の視察とガイドの案内、看板のチェックはしたが、ミュージアムショップは訪れることはなかった。その時に自分が審査員から言われたので、事務局に「ミュージアムでどういうことをやっているかということ時間を取って説明した方がいいのではないか」ということを打診した。そこでゼネラルマネージャーと事務局長が承諾して急遽30分ほど別室で、玄武洞ミュージアムでは何をしているのかということと、ゼネラルマネージャーが直接撮影したショップの写真を見せながらその施設の現状と、今まで何をやってきたかということの説明をした。

事務局の主張としては、今後とも対応を続けていくとの通り一辺倒だった。審査員からの一言の中でキーになるのは「国際的な価値のある場所で地質資源鉱物を売るのは深刻な問題である」ということで、もう少し内容を確認したいということになった。

例えば、玄武洞は私有地なのか、法的に守られているのか、玄武洞公園で行われているガイドによるツアーの主導をしているのはバス会社なのか等、少し突っ込んだやり取りがあった。

それから、玄武洞ミュージアムの展示とジオパーク協議会の関わりについて、展示には関わっていないが、個人的なアドバイスはしていると山陰海岸ジオパークの学術専門員がコメントした。

その中で審査員は2つのレベルの問題があるのではないかと指摘した。一つは、販売行為だけではなく、ジオパークの組織の内部における、地質鉱物販売行為に関するプレゼンスがない、ということが問題だとい

うこと。また、どのように販売行為を考えていけばいいかということ協議会の中で検討するべきではないかという指摘があった。2年間対応してきたと言っていたが、それにおける業者と協議会間のやりとりの議事録はないのかといった質問には、それはあくまで非公式の会議なので話しをした日は分かるが議事録はないということであった。

審査員からは、最初にするべきことは協議会のなかで問題提起をすること、また、運営・マネジメントのガイドラインの中に販売の抑制を加えておいて、リコメンデーションを出す・出さないに関わらず対応を進めていくということが建設的な解決方法ではないかというアドバイスを現地調査でいただいている。

委員長：実際には、ミッションレポートでは前出のリコメンデーションと共にグリーンカードで提出されたが、議長をはじめ、この問題について非常に目立つので議論をしたということだと思う。

委員：補足だが、大きな一つの要素として、これは山陰海岸だけの問題ではなく、ユネスコ世界ジオパークのブランド全体に悪影響を与えるということがある。この問題を放っておけば、日本のジオパークにも広まり、ひいては全世界のユネスコ世界ジオパークのブランドに害を与えるのではないかという声は何度もあった。

もう一つは、ジオパーク推進協議会が問題解決に向けて全力を尽くしたかに関しても議論があった。そこで指摘されたのは、ジオパークが発行している媒体の中でメインの施設として紹介されていること、ジオパークが提案しているモデルコースの中に行く場所の目的地として含まれていることが指摘された。

また、当該施設のウェブサイトの中でユネスコ世界ジオパークに認定された地域であると紹介していることが問題として指摘された。

ジオパークはそもそもミュージアムショップと十分な距離を取っていないと明確にしていない。また、どうして地質資源の販売が良くないのかといったことに関してもオープンに言及していないといったこともかなり批判されていた。

ジオパークの事務局が実際に販売しているというわけでもなく、玄武洞の区域は豊岡市が所有している土地であり、ミュージアムショップも事務局がやっていなくても構成団体の会員が販売行為を許しているとみなされるという指摘もあった。

事務局：玄武洞のサイト自体は豊岡市が所有しており、ミュージアムはもともと農家だった方がやっているということがミッションレポートに書かれていた。状況把握に時間がかかったところもあったが、都度事情を知っている人が説明しながら議論が進んでいた。インターネットで、英語で検索しても情報が出てくることがスライドでも紹介され、ミッションの報告に、そういったプラスアルファの情報が追加されたうえで議論された。

ミュージアムの写真を内部のものも含めて見たうえで、この施設自体は素晴らしいので、工夫次第では一緒に協力していけるのではないかと、ここでサポートを惜しまず協力することで日本のジオパークとして歴史がある山陰海岸ジオパークならば解決できるということを期待して、ここでベストプラクティスを作ってもらおうというポジティブな結論で終わっている。

委員長：文科省は何かあるか。

文科省：審査員の報告ではグリーンカードということだったが、その後議長が「深刻な問題なので議論の必要がある」ということで、審査員の方々が鉱物が売られていることに対して「絶対に許されないこと」というようなトーンで話をされていたが、山陰海岸ジオパークは日本では歴史のある世界ジオパークということで、きちんと改善されるようにみんなで支援していこうという結論となった。

また、このような経済が絡んだ問題はストップをかけることが難しいが、協議会はいエローカードという結果を利用して改善に向けてもらいたいという話もあった。

その後、JGN 事務局長と山陰海岸ジオパークの協議会の方と話す機会があったが、前述のようなカウンス

ルメンバーの配慮・期待、鉱物販売はなぜだめなのかという理由などが、傍聴していた方々でもきちんと理解されていなかったということが、今後の対応のネックになってくるだろうという話をした。

ただ、今後イエローカード認定やその理由についての報道がされたとき、協議会の方々がまず内容を理解して正しい説明ができないと、話しが意図しない方向にいてしまいそうだという懸念がある。それをどう対応していくかというところをもう少し議論していく必要があると考えている。

委員長：何かコメントがあればお願いします。

委員：山陰海岸については、辛口ではあるが、審査員が来たときにミュージアム等の問題をはっきりと提示しないという姿勢が良くなかったと思う。

もう一つ、これは世界でも議論になっていることだとは思いますが、持続可能でない地質資源の採取・販売といった行為を行っている業者をジオパークエリアに含めないようにボーダーラインを引くことや、含まない選択をすることで、問題が潜在化して隠れてしまう構造が出来上がっている。そういった問題が存在するエリアをジオパークに敢えて含めて、問題を解決していこうとなぜならないのか、ということは世界でも議論が進んでいないところかもしれない。

山陰海岸ジオパークについては、「売買を行っている業者はジオパークのパートナーではないから」という理由を述べているが、ジオパーク側が自分事として考えられていないことの原因となっていると思う。この解決に取り組んでいくためには、落としどころも決めないまま対話をするだけではなく、協働していく、一緒に問題を解決していくというところに至る必要がある。そこに至っていないのが問題なのかもしれない。プログレスレポートからは、残念ながら対話によるプログレスが読み取れない。

こういった問題は山陰海岸だけでなく、調べればいろいろな場所に出てくると思う。先日のカウンスルでも、今後次から次へ同様の問題も出てくるだろうと話されている方もいて、山陰海岸ジオパークがこの件でグッドプラクティスを示していくという意味でも、この問題に向き合って解決していこうという考えがあった。

私が山陰海岸に行ったときの感覚からすると、山陰海岸の方々だけでこの問題に取り組んでいくのはとても難しいと感じている。世界に対して良い事例を見せるという意味でも JGC、JGN としてどのようにこの問題をサポートするかということを実際に議論すべきだと思っている。

委員長：非常にポジティブな意見、感謝する。

次に、これまでの報告に質問・意見等あればお願いします。

委員：販売されている鉱物というのは玄武洞現地のものだけなのか、それとも世界中から集められたものなのか。

委員：世界中の鉱物が売られている。産地も明記されている。現地審査の中で、ゼネラルマネージャーが「売られている鉱物はそこまで高価なものではない」と説明していたが、実際そんなことはない。それなりの価格でそれなりの量の岩石鉱物、しかも世界中のものが売られているというのが現状。

委員：事実確認をさせていただきたい。現地審査の時に玄武洞ミュージアムの方と審査員は直接議論されたのか、それとも事務局と審査員だけだったのか。

委員：玄武洞ミュージアムの方と審査員は直接議論していない。審査員は施設の中にも入っていない。これは非常に大きな問題で、審査員は課題がある場所をなぜ見せないのかと疑問に感じたと思う。私も審査員には隠す意図があるわけではないことを口添えし、審査員もそれについては理解してくれていたが、やはり問題を真正面から解決するというよりは逃げている、隠していると受け取られても仕方がないような行程・内容だったことは否めない。これは意図的ではないのかと質問もしたが、関係者の都合が合わずできなかったという回答だった。

委員長：この問題の存在は我々も初めからずっと知っていた。これは理念に合わないのととにかく関係ないという方向で追及は逃れようという議論も実際にしていた。ただ、これだけリニューアルして人が入りやすい施設になったので、問題が顕在化してきたということだと思う。そういう意味では責任の半分は委員会側にもあると私は思っている。

事務局：文科省と JGN 事務局と山陰海岸ジオパーク事務局とで振り返りと今後の報道対応などをどうしていくかという会議をすでに一度行った。その時に、今までずっとやっていたことをわかっていただけではないという事実誤認があるのでそれを訂正したいと言っていた。それを訂正したらレッドカードになるかもしれないということはお伝えした。

山陰海岸ジオパークとしては、国内法に違反しているわけでもなく悪いことはしていないのに、ガイドラインに書いてあるということだけでイエローカード判定にされたとショックを受けている様子。そもそもジオパークはなぜ鉱物販売をなくそうとしているかという理由を話し合い、明確にする機会を設けていくということが大事だと伝えた。

もう一つ提案だが、山陰海岸ジオパークの方に認識のずれがあると思うので、可能であれば年内に傍聴した複数の方々と JGC の委員にも入っていただき、議論の内容を振り返る機会を作れないだろうか。

委員長：その提案には賛成する。

委員：事実確認だが、前回のプログレスレポートに「エリア内で石の販売を行っている業者に 2020 年に山陰海岸ジオパークが書面を出した」とあるが、それについてはどうか。

事務局：やりとりが全くなかったというわけではない。対話はしてきたということはプログレスレポートにも記載しているし、それはカウンスルも理解したうえで議論している。

カウンスルでは JGC、JGN に手紙を書いて緊急に対応してくれと働きかけたらどうかという提案も途中で出たくらいだったが、JGN でも新しいワーキンググループができおり、山陰海岸からもそのWGに参加していたりと対応はしているようだが、それでは対応として足りないのでイエローカードを出すことによって、できる限りのことを早急にやってもらう必要がある、それでも解決に至らない場合は関係を断ち切るという手段を取るしかないかもしれないが、それまでにやれることはやるべき、という議論だった。カウンスルは JGC から支援をしてほしいというメッセージを聞いている。

委員長：質問があればお願いします。

委員：初歩的な質問かもしれないが、UGGp のガイドラインは鉱物や石の売買についてどこで線引きをしているのか。例えば、石のすべてを売ってはいけないということであれば墓石も売ってはいけないということになる。それは許されるというのであればその境界線はどこになるのかという話になる。ジオパークエリア内で採掘した石を別の場所で墓石に加工するという場合もあるかもしれない。地質系のミュージアムだと世界の鉱石などを売るのはかなり一般的だったりするが、それもだめということになるのか。あるいはジオパークの中の産品を売るということがだめなのか。どこまでがだめなのかが分からないので、それについて簡単な説明をお願いしたい。

委員長：線引きは非常に難しい。例えば石灰岩や花崗岩といった岩石は生活に欠かせないものなので、地形的な影響を小さくする、あるいは災害を引き起こす可能性を避けながら採掘を維持していくかという話になるが、この場合は、化石・鉱物標本を人の物欲を満たすために販売している。そういった行為は厳重に禁止するというように理解されている。

委員：経済活動としての鉱物の売買は禁止ということになるのか。ミネラルショーといったものもだめになるのか。博物館や学会でも千円程度で鉱物標本が売っていたりするが、それもジオパークの中では禁止の対象となるのか。

委員長：ジオパークはそれには関与してはいけないということになっている。

委員：理念ということではわからないでもないが、我々も大学で学生に標本を見せたいので学会で鉱物を買ったりする。ジオパークではないところから化石を購入したりするが、そういうこともジオパーク内ではやらないということになるか。

委員長：基本的にはやらない。ただミュージアム同士が貴重な標本などを交換して展示するということはもちろんありうる。宝石も含めて一般的な経済活動としての売買については、ジオパークは関与してはいけないということになっている。

委員：ジオパークが関与しないということですのであればそれでもいいのかもしれないが、はっきりした線引きが非常に難しい。今少し触れられていたが、デパートで宝石を売ってはいけないのかということになる。ジオパークとして禁止ということであれば、エリア内のデパートに宝石店は入れられないということになるのではないか。

委員長：ジオパークというブランドを活用して売っているという行為が禁止されているという認識でいいと考える。

事務局：それについての議論の時間がないので、ガイドラインの3番の「ユネスコ世界ジオパークの基準」のところに今の質問については明記されているので、そこを押さえたうえでの議論を求めたい。

委員：今、ご指摘の部分を説明していただいた方がスムーズだと思うが可能か。

事務局：承知した。該当の部分を読ませていただく。

ユネスコ世界ジオパークは、地質遺産の保護に関連する地域や国内の法令を尊重しなければならない。ユネスコ世界ジオパークにおいて位置づけのなされた地質遺産サイトは、いかなる申請にも先立って、法的に保護されなければならない。同時に、ユネスコ世界ジオパークは、地域や国内において地質遺産の保護を推進するために活用されるべきである。管理運営団体は、ユネスコ世界ジオパーク内において、化石・鉱物・磨かれた岩石・いわゆる「石の店」で通常見られるタイプの装飾用の石等の地質学的なものの売買に直接関わってはならず（いかなる産地のものであろうとも）、地質学的な物質の持続可能でない取引全般を積極的に防ぐべきである。責任ある行動であり、サイトの管理運営として最も有効で持続的な手法の一部であるとはっきり説明ができる場合、ユネスコ世界ジオパーク内の自然再生可能なサイトから、科学や教育目的のために、地質学的な物質の持続可能な採集を許可できる場合がある。」

以下は例外について触れているため省略する。

委員：不当労働・児童労働、小規模な手掘りの金鉱山に伴う水銀の利用と汚染の問題は世界中で見られる。重金属関係の鉱山であれば排水は重金属汚染されていることが多いので問題となる。いわゆるグローバルサウスと呼ばれる国々でそういったことが行われているということは事実として報告されているが、ブラックな鉱山のデータベースがあるわけではない。ユネスコははっきりと取り扱わないという姿勢を見せている。

地質物品の問題にはそういった違法・不当労働や、汚染に絡む業者、化石の場合は盗掘などといった背景がある。ブラックな地質物品はミネラルショーでも販売されていたりする。そういう問題のある地質物品かわかなければ売っていいということではなく、どういう風にそういった背景を含めた問題に取り組んでいくか、まずは取り扱っている人が現状を理解していくことからスタートしないと始まらないと思う。

山陰海岸ジオパークも同じで、世界に対して2年後どこまでの対策を示すのかということ、皆で到達目標を設定するところからスタートだと考えている。

委員：補足で、地質鉱物資源の販売行為に潜む本質的な問題を地域の方々が理解したうえで、この問題をどう解決していくかというワークショップや議論をしようという提案は昨年度山陰海岸ジオパークにしている。そういった説明をする場を設けてもらえれば私たちも協力できるという話はしていたが、残念ながらその機

会は作られなかった。

文科省：カウンスルの中でカウンスルメンバーの方が言われていたことの中に、山陰海岸ジオパークは12名とスタッフが多いが、フィロソフィがきちんと理解されていないのではないかという指摘もあった。

そもそもジオパークというのは、地質遺産を保護して行くことが第一目的であるというところで、ガイドラインの中でも地質遺産の保護の観点から鉱物販売が禁止されているということを知ることが重要かと考えている。

ジオパークのサイトで鉱物を買うことが推奨されていると観光客が思ってしまうと、地質遺産の保護というジオパークの本来の目的から外れてしまう。そこがカウンスルのメンバーが最も問題視しているというところだと私は理解している、山陰海岸ジオパークの協議会の方々はそういった認識がないと感じられたので、そこをまず理解していただくためにどうしていくかということが重要かと考えている。

委員：先送りにしていた問題がここで顕在化したという感想。この地域で難しいのは事務局にジオパークについて対話できる人があまりいないということが課題。事務局がなぜ鉱物販売がダメなのかを理解できていない。まず対事務局の話し合いが必要だということがあるし、対販売業者に対しても話し合いが必要だとは思っている。

しかし、そもそも彼らがいたからあそこでジオパークが始まったということも事実。彼らとの長年の付き合いがある中で、対応をしっかりと考えないと「イエローカードの理由は販売業者だ」という話だけが先行してしまうと、悪者扱いされてしまう可能性が非常に高い。

一方で、リニューアルする際に自分たちが何で資金を得ているかということを確認したが、やはり鉱物資源の販売に大きく生計を頼っている人々もいる。豊岡市が関係していることも問題を複雑にしている。そのあたりを紐解きながら次をどうするかという議論を対販売業者にもできる環境をどう作っていくかということがひとつ。それから対地域としてだが、この問題のまともな議論ができるよう、いくつかのステップに分けて対応を考えていく必要があると思う。

委員長：提案は出尽くしている感じもあるが、実際それ以上のことは手立てがないという気がする。とにかく、今回のことに関して地元と年内に審査でどういったことがポイントになったかということを理解しあうということが必要だと考える。

委員：糸魚川は最初の審査の時から翡翠を売っているということは隠しようがなかったもので、審査はその話から始まったし、正面から対応されてきている。今回の問題でもその経験を活かしていただけるのではないだろうか。

委員長：全くその通りだと思う。今回は逆に「糸魚川も売っているではないか」という方向に行きかけたということもあるので、それに対してもはっきり理解していただく必要がある。

その後は、そもそもなぜ鉱物資源を売ってはいけないかということを実地の方も含めてJGCの委員と議論して理解してもらうことが必要かなと考えている。その上で業者にどう向き合っていくかということも議論して、この1年で決着を付けないとカウンスルの方からも指摘が入るだろうと思う。

海域については今すぐ申請ということでもないので、明日の基準検討会でも議論をし、いろいろ意見をを出していただく。出られる方は出席をお願いするところである。

本日は以上で終了とする。